

同族目的語構文について

山 田 佳 子

0 序

(1)は、一般に非能格動詞と呼ばれる動詞を用いた文である。

- (1) a. He slept.
 b. She dances.
 c. We sang.
 d. He lived.
 e. We laughed.

非能格動詞は多くの場合、同族目的語構文に現われることができる。同族目的語構文とは、動詞と同形あるいは同語源の語や、同義語、類義語を目的語としてとっているような構文で、具体的には(2)で示されるようなものである。

- (2) a. He slept a sound sleep.
 b. She danced a jig. (Hale & Keyser 1993 : 97)
 c. We always sing a song.
 d. He lived a happy life.
 e. He laughed a hearty laugh.

非能格動詞を用いた同族目的語構文は、多くの場合一つの類をなすとして扱われる。しかし、実際はこの構文に現れる同族目的語は全て同じ統語的振る舞いを示すわけではない。その事実から、「副詞的同族目的語」といわれるものと、「目的語的同族目的語」といわれるものの2種類に分類されると主張する文献

がある(安井(1983))。(この分類については1節で詳しくみる。)

この論文では、非能格動詞が同族目的語をとる場合について、その同族目的語が副詞的同族目的語である場合と目的語的同族目的語である場合とでは、どのような意味的、統語的違いがあるのか、またその違いをうまく説明するメカニズムはなにかあるのか、という問題について考えてみたい。

まず1節では、同族目的語構文を2種類に分類する根拠となる事実を提示する。2節では、ここでの分析の基盤となる Hale & Keyser (1991、1993) の非能格動詞の分析を概観する。3.1 節で、副詞的同族目的語を持つ構文と目的語的同族目的語を持つ構文との意味的違いを考察し、それをもとに3.2 節で2種類の同族目的語構文の区別の説明を、Hale & Keyser (1991、1993) の分析を基に考える。4 節は3 節の分析の補足的議論、5 節は結語である。

1 副詞的同族目的語と目的語的同族目的語

(2)に挙げた同族目的語構文には、同族目的語が形容詞を伴っているものと伴っていないものがある。この様に、同族目的語には、形容詞を義務的に必要とするもの(ここでは便宜上A類と呼び、この類の同族目的語をとる動詞をA類の動詞と呼ぶ)と、随意的に取るもの(B類)との2つがある。

(3) (A類)

- a. *He slept a sleep. (cf. (2a))
- b. *He lived a life. (cf. (2d))
- c. She shouted a loudest shout.
- d. *She shouted a shout.
- e. *We laughed a laugh. (cf. (2e)) (a-d: 現代英文法辞典: 256)

(4) (B類)

- a. She danced a mysterious dance.
- b. She danced a dance. (Quirk et al. 1972 : 750)
- c. We sang a beautiful song.
- d. We always sing a song when school starts in the morning.

(現代英文法辞典用例：256)

また、同族目的語構文で、「動詞＋形容詞＋同族目的語」を「動詞＋副詞」の形に書き換えられるか否かについても、2つの類に分かれる。

- (5) a. He laughed a hearty laugh.

=He laughed *heartily*.

- b. He slept a sound sleep.

=He slept *soundly*.

- c. He lives a happy life.

=He lives *happily*.

(ibid. : 256)

- (6) a. She danced a mysterious dance.

≠She danced *mysteriously*.

(cf. She danced a mysterious dance poorly.)

- b. She sang a beautiful song.

≠She sang *beautifully*.

(cf. She sang a beautiful song out of tune.)

- c. Bob dreamed a strange dream.

≠Bob dreamed *strangely*.

(b, c : ibid. : 256)

興味深いことに、この分離は、形容詞の義務性についての分離とおおかた一致する。つまり、この書き換えが可能なのは同族目的語に形容詞を伴うことを要求する(3)のA類になり、書き換えが不可能なのは形容詞を義務的には要求しない(4)のB類になる。¹

この分離に関して観察されることがさらにいくつかある。A類の同族目的語は、(7)が示すように受動化されたり、疑似分裂文の焦点となることが不可能で、代名詞化も許されない。

- (7) a. Mary laughed *an unpleasant laugh*.

- b. *An *unpleasant laugh* was laughed by Mary.

- c. *What Mary laughed was *an unpleasant laugh*.

- d. *Mary laughed an unpleasant laugh and Susan laughed *it* (or one), too.

(ibid. : 256)

一方、B類の同族目的語はそれらの過程を受けることができる。

- (8) a. Mary sang *a beautiful song*.
 b. *A beautiful song* was sung by Mary.
 c. What Mary sang was *a beautiful song*.
 d. Mary sang a beautiful song and Susan sang *it* (or one), too.
 (ibid. : 256)

これらのことから、表面的には同じ構造であっても、同族目的語といわれるものには2種類あるとしてよいことが察せられる。(3)のA類は、(5)に示されるように副詞を用いて表されることができるので「副詞的同族目的語」、(4)のB類は、他動詞の目的語と同じ統語的振る舞いをするので「目的語的同族目的語」と称されることがあるが (cf. 安井 (1983))、ここでもこれらの名称を用いることにする。

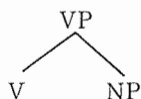
ここで問題は、この分離はいったいどのような違いに基づくのかということになる。それを考察する前に、次節で、Hale and Keyser (1991、1993) の非能格動詞の分析を概観しておこう。

2 非能格動詞の生成：Hale & Keyser (1991、1993) の分析

Hale & Keyser (以後 H & K と表記する) (1991、1993) は、述語項構造自体が、その語彙主要部と範疇投射、項との関係を表した構造である語彙関係構造 (Lexical Relational Structure, LRS) を含む一種の統語部門であると主張し、それを l 統語部門 (l-syntax) と呼んでいる。l 統語部門に対して、従来の意味で統語部門とされていた部門を s 統語部門 (s-syntax) として区別している。この LRS を用いた分析のもとで、非能格動詞はどのように生成されるのだろうか。

彼らは、この類の動詞はある出来事により何らかの名詞で表される事態が生じることを含意しているので、LRS 表示では、軽動詞 (light verb) と同様の働きをする動詞が、名詞を選択した形になっているとしている。²

(9)



この LRS 表示は、創造動詞 (creating verb) の様な単純他動詞の LRS 表示と同じ形であり、(9) がそのまま投射されると、(10) の様な文が生成される。

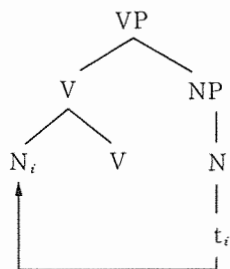
(10) a. We had a good laugh.

b. She did her new song.

(H & K 1993 : 73)

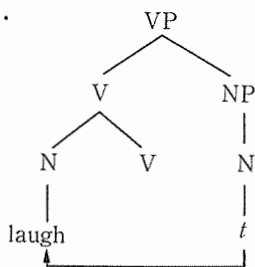
一方、非能格動詞の生成においては、(10) の場合と異なり、NP が変項ではなく定項となっており、それが(11)に示される形で動詞に編入される。³

(11)

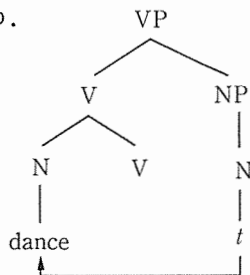


具体的には、laugh と dance の LRS 表示は(12 a)と(12 b)になる。

(12) a.



b.



ここで、LRS が s 統語部門へ投射された場合、その統語表示がどのようになるのかということについて少し触れておこう。H & K は、l 統語部門の表示において空範疇を支配している節点は s 統語部門では表されないが、l 統語部門

の表示そのものは消されたり失われたりせず、完全な形で保持される、としている (cf. H & K (1991: 17, 57))。また、語彙項目の挿入は、句範疇として s 統語部門へ導入される (cf. H & K (1993: 95))。例えば、(12)の VP は、内部構造を保持したまま、VP へ laugh, dance として挿入される。

問題は、語彙部門での LRS における編入等の操作 (の連鎖) が s 統語部門で可視的であるかどうかである。従来は、語彙的な過程と統語的な過程は厳密に区別されるのが一般的であった (cf. Wasow (1977))。しかし、もし語彙部門での操作が s 統語部門で全く不可視的であるとする、make 等の単純他動詞と break 等の能格動詞とが事実上統語的に区別できなくなってしまう。このことから、H & K は各々の語彙項目の語彙部門での派生を示す LRS 表示は可視的であるだろうと示唆している (cf. H & K (1993: 97))。

また、彼らは、(12)の LRS の語彙主要部である V の格付与特性に関して、この編入という語彙操作は (少なくとも英語においては) V の格付与能力を変化させず、s 統語部門にまで保持され则认为している。従って、結果構文の名詞や同族目的語はこの格を利用できると考えられる (cf. H & K (1991: 20))。

さて、前節で、非能格動詞が同族目的語を伴って現われた場合に、その性質によって 2 つに分かれる、という事実をみた。それによると、(12)の laugh と dance は性質を異にしていたはずである。しかし、ここまでの H & K の非能格動詞の分析では、両者を区別できるような点はなにもない。

では、前節で示された、非能格動詞の同族目的語構文に関する違いはどのように説明され得るだろうか。次節では、この問題に取り組む。

3 分析

3.1 同族目的語の意味特性の相違

同族目的語構文に関する分離の考察に入る前に、H & K の非能格動詞の分析をもう少し詳しく見てみよう。

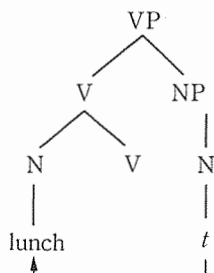
LRS というのは、ある語彙主要部と項との関係を表したものであり、従って、(12)の V は特に意味を持たず、ただ単に範疇 V だということを示しているのみ

である。例えば、次の lunch、fish という動詞は、laugh や dance と同様に、LRS での名詞の編入によって生成されると考えられるが、これらの LRS において動詞 V 自体にはそれぞれ have、catch という意味はない。

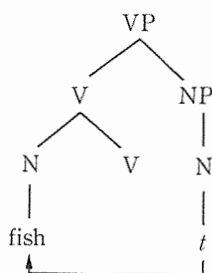
(13) a. We *lunched* out.

b. My father and I *fished* in the river.

a'.



b'.



つまり、Vの姉妹の位置にある、編入されるNは、Vで表される出来事の特徴づけをするという性質を持っている、ということができよう。

さて、非能格動詞が同族目的語をとった場合、その同族目的語が副詞的であるものと、目的語的であるものとがあることを1節でみた。しかし、副詞的同族目的語をとるものと目的語的同族目的語をとるもの、どちらの非能格動詞についても名詞範疇のもので特徴づけられる出来事を表すという点では同じである。従って、非能格動詞自体の生成に関しては、2節で概観した H & K の分析を正しいとして受け入れることにする。

ここまでで、①各々の同族目的語構文に現われる動詞の派生自体には差異はないこと、②非能格動詞の派生においてその動詞を特徴づけるものが編入される名詞であること、が主張された。それらのことを前提とすれば、各々の非能格動詞の同族目的語に関する特徴の違いは、編入される名詞の特徴に起因していると考えられる。

ここで、2節で示された、2種類の同族目的語構文をもう一度詳しく見てみよう。それぞれの類の代表例として、laugh と dance をもう一度挙げておく。

(14) a. A類：副詞的同族目的語

He laughed *a hearty laugh*.

b. B類：目的語的同族目的語

She danced a mysterious dance.

それぞれの文の同族目的語である名詞 *laugh* と *dance* の意味特徴に目を向けてみると、その性質に違いのあることがわかる。まず、*laugh* の場合は、笑う行為の結果「笑い」という抽象的な事態が存在し得るという関係がある。逆にいえば、「笑うという行為」がなければ「笑い」は存在しない、といえる。この意味的性質は、Quirk et al. (1972 : 750) で、「出来事目的語」(eventive object) として説明されている名詞の性質に通じているように思われる。

- (15) This EVENTIVE OBJECT is semantically an extension of the verb and bears the major part of the meaning.

(Quirk et al. 1972 : 750)

つまり、この類の名詞の意味内容はある出来事に依存しており、それ自身で独立した具体的指示物は持たない。

一方、*dance* の場合は、「踊り」そのものがVで表される出来事、つまり「踊る行為」とは独立して存在している。*dance* について言えば、踊るという行為を誰かがしなくても踊りそのものは(例えば「誰々作の踊り」というように)、独立した指示を持つ具体的事物として存在する。歌についても同じ事が言えるであろう。その証拠に、*dance* や *sing* の場合は踊りや歌のさまざまな種類を目的語としてとることができる。

- (16) a. John danced a jig. (H & K 1993 : 97)

b. Mary danced a waltz.

c. They danced the ancestral rain dance.

(Progressive 英和中辞典 : 473)

- (17) a. The soprano singer sang an aria.

b. We enjoy singing carols at Christmas.

(Longman Dictionary of Contemporary English : 981)

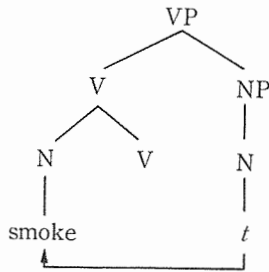
(16)、(17)は、*dance* や *sing* の目的語が、ある一つの完結した作品として、独立した指示を持っていることを示している。

このことを解りやすく示すのが、(18)の動詞 *smoke* である。

(18) I don't smoke.

smoke は、さきの H & K の分析に基づくと、LRS での名詞 smoke の編入により生成されると考えられる。

(19)



しかし、この動詞の目的語として “smoke” はあまり一般的ではなく、より一般的には (20 a) や (20 b) の様に “ciggars” (あるいはそれに類する語) が目的語として使われる。⁴

(20) a. He smokes ciggars.

b. He smokes Lucky Strikes.

(19) の編入される smoke は、文字通り「煙」の意味ではなく「煙草」を含意していると考えて良いだろう。この類の同族目的語として「煙草という物体」だとよりはっきりわかる語が好まれるとすれば、あいまいな smoke よりは cigar や煙草の銘柄を用いた方が良い、ということに説明がつくであろう。

この様に、非能格動詞と称されるものは、副詞的同族目的語をとる A 類と、目的語的同族目的語をとる B 類に相当する形で、その生成の際に編入される名詞の意味的性質に違いがあることがわかる。

3.2 構造的位置の相違

前節で考察した名詞の意味特性の違いをふまえて、次のことを仮定する。

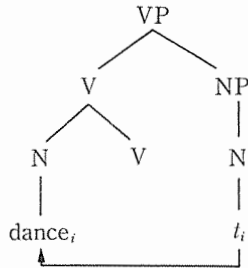
(21) 独立した指示を持つ名詞は s 統語部門において、l 統語部門で残された痕跡位置に随意的にコピーの構築が可能である。⁵

前節で述べた意味において独立した指示を持つ名詞は、ある出来事に依存していない事物を表す、という意味特徴を持っている。ならば逆に、これらの名詞

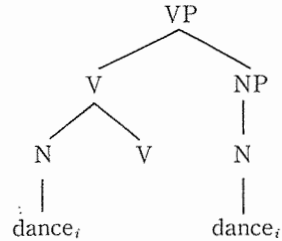
は何らかの動作の対象となり得ると考えられる。従って、そのような名詞が、LRSにおいてもともと存在していた位置、つまりVの姉妹位置に現われるということは、構造的にも支持できるであろう。

(21)には独立した指示物を持つ名詞が関わっているので、(21)によってコピーの構築が適用されうるのは目的語的同族目的語をとるB類の非能格動詞である。目的語的同族目的語はこのコピーが具現されたものであると考える。^{6,7} コピーの構築がされた場合の具体的な構造は(22 b)である。(編入されたNとその痕跡とコピーの指標はもちろん同じである。注意したいのは、ここで言う「独立した指示物を持つ」というのは、指標の問題ではなく、上で述べた、名詞自体の意味特性のことをいっているということである。)

(22) a.



b.

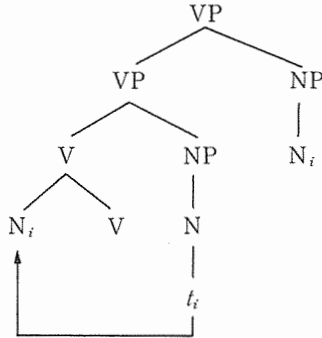


(22 a)の痕跡と(22 b)のコピーの位置は、複合体Vと姉妹の関係にあるので、このVから θ 役割(おおかたは主題)を付与される位置である。従って、この位置は内項位置であるといえる。故に、この位置に同族目的語として具現された要素は、他動詞の直接目的語と同じ振る舞いをする事が予測される。事実先に示したように、この類の同族目的語は受動化が可能である(8 b))。

一方、副詞的同族目的語をとるA類の非能格動詞の派生に関わる名詞は、出来事Vによって起こる事態を表すという点で、独立した指示物を持つとは言えない。従って、(21)に従えばコピーの構築はされない。この類の名詞は、ある出来事に依存する事態を表すので、その類の名詞を(何らかの形容詞、あるいは前置詞句などそれに準ずる修飾語句で)修飾することは、その名詞で表される事態が依存している出来事を修飾することになる。まさにこの性質から、この類の名詞は、それ自身が編入してできた動詞の表す出来事を修飾する媒介と

して機能できると考えられる。そこで副詞的同族目的語構文に現われるA類の非能格動詞に関しては、(23)に示すように、(イタリック)NPがVPに付加される形で、随意的な構造の拡張が可能であると考ええる。

(23)



(23)で導入されたNPはVPに付加された位置にある。その構造はVPによって表される出来事をNPが修飾する構造であり、それゆえ副詞的である。この拡張によって導入されるNPがこの位置で複合体Vから θ 役割を与えられないとすると、⁸ このNPは項ではないので、LRS、つまり1統語部門には存在し得ない。よって、(23)の拡張はS統語部門で行なわれると考えられる。また、この拡張は修飾のために行なわれるので、修飾の必要のない場合はこの拡張は行なわれない。⁹

この分析をとると、1節でみた副詞的同族目的語の特徴が捉えられる。まず、この類の同族目的語は、必ず形容詞を伴わなくてはならなかった((3))。この拡張に関わるのは、独立した指示物を持たない出来事に依存した名詞であるから、もしこの位置に名詞が形容詞を伴わずに現われると、すでにVP内にある情報を余剰的に繰り返しているだけになってしまう。例えば、「笑いを笑う」という、形容詞を伴わない表現は余剰的であると感じられる。従って、この拡張が可能であるのは、修飾詞として新しい伝達情報を持った形容詞（あるいは前置詞句などそれに準ずる修飾語句）を伴った場合のみである。¹⁰ その形容詞は出来事に依存した名詞を修飾することにより、間接的にその出来事Vを修飾し、「形容詞+名詞」は事実上副詞として機能することになる((5))。一方、目的

語的同族目的語は独立した指示物を持つので、形容詞を伴わない場合でも余剰的にはならない ((4))。例えば sing a song であれば、「ある歌を歌う」という意味を表す。

また、副詞的同族目的語は、独立した指示物を持たないという意味特性のため、疑似分裂文の焦点になったり、代名詞化されたりすることができない ((7c)、(7d)) といえる。一方、目的語的同族目的語は独立した指示物を持つ名詞であるので、代名詞化や疑似分裂文の焦点化の対照となりうる ((8c)、(8d))。

さらに、(23)の NP が、(22b)の構築されたコピーとは異なって θ 役割を与えられない、修飾語として機能するものであるとすると、(23)の NP が具現した副詞的同族目的語が受動化という目的語的特徴を示さないことも理解できる ((7b))。

ここで、目的語的同族目的語構文について考えておかなければならない問題点がある。本稿で主張されたように、目的語的同族目的語が項として目的語位置に具現されるのであれば、この構文と通常他動詞構文との差異はどこにあるのだろうか。他動詞構文においては、(恣意的解釈を与えられる場合も含めて) 目的語の生起が義務的である。これは、他動詞の場合、目的語で表されるその動作の対象となる事物をも含めて、はじめて完結した述語となり得るからである。

しかし、目的語的同族目的語をとる非能格動詞の場合は、2節でみた語彙部門での生成過程に含まれる編入操作に示されるように、動詞自体に動作の対象となる事物が含意されている。よって、非能格動詞は、他動詞とは異なり動詞のみで完結した述語として機能できる。目的語的同族目的語は、動詞の意味のなかに含意された名詞を語彙的に具現しただけである。注意しなければならないことは、この名詞の具現自体は非能格動詞の述語性とは無関係であるということである。非能格動詞が単独で述語であることを保証するのは、1統語部門でVの姉妹位置にあり、s統語部門では動詞の意味のなかに含意されている名詞の存在である。その意味で、この名詞は項であり、その具現である目的語的同族目的語も項であるとみなされることができる。

従って、他動詞構文と目的語的同族目的語構文は、s 統語部門における構造は同じであるが、類として持つ動詞の意味特徴が異なっており、その差異が目的語の義務性として現われてくると結論できる。

以上、この節では、副詞的同族目的語と目的語的同族目的語は、構造的に異なる位置にあることを示した。副詞的同族目的語と目的語的同族目的語は各々、(23)と(22 b)の構造中に示される異なった位置に現われる。後者は項とみなされ目的語的な特徴を示す一方、前者は、その位置からわかるように、副詞的な機能を果たす要素であるために目的語的な特徴を示さない。また、各々の同族目的語にはその指示性において違いがあり、疑似分裂文での焦点化や代名詞化の可否は、その意味的特性の違いによると主張した。

4 補足的考察

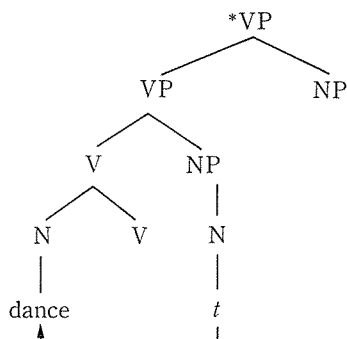
4.1 同族目的語の格

2 節でみたように、H & K の分析では、非能格動詞の LRS は、単純他動詞の LRS と同じであった。また、その LRS の語彙主要部である V の格付与能力は、非能格動詞の派生の際に行なわれる語彙的な編入の操作によっては変化しないため、同族目的語はその格を利用できるとされていることもふれた。Baker (1988) の編入の理論では、編入された名詞は格を受ける必要はないとされている (Baker (1988 : 105ff).)。よって、語彙主要部が編入という語彙操作を経て 1 統語部門から持ち越した格を、同族目的語が利用できるという点については、ここでも彼らの説明をそのまま受け入れることにする。また、格が m 統御に基づく統率のもとで与えられるとすれば、(23)と(22 b)に示されている同族目的語の現われる位置は格については問題がない。¹¹

4.2 構造的拡張の可否

残る問題は、目的語的同族目的語構文において、なぜ副詞的同族目的語構文の場合と同様に、(24)の様な構造的拡張が起こらないのか、ということである。

(24)



拡張によって導入されるイタリックの NP 位置は、V によって表される出来事を修飾し、その出来事の特徴づけするための要素が現われる位置であることは前に述べた通りである。そのため、この位置は、laugh の様に出来事に依存した事態を表す名詞と連結されなくてはならず、V で表される出来事とは独立した指示物を持つ song や dance といった名詞は、この位置に現われることはない。従ってこの類の名詞が関わる非能格動詞に関して (24) の拡張が起こることはないといえる。

5 結語

本稿では、非能格動詞と共に現われる同族目的語といわれるものが、統語的振る舞いの違いから、副詞的同族目的語と目的語的同族目的語の 2 種類に分けられる事実を指摘し、その違いを、Hale and Keyser (1991, 1993) に提案されている LRS に基づく非能格動詞の分析を修正することにより、説明を試みた。非能格動詞は、その出来事の特徴づけする名詞範疇が、LRS で V へ編入することにより生成される。編入される名詞が、「V で表される出来事とは独立して存在する」という意味で独立した指示物をもつ場合には、V の姉妹位置にあるその痕跡位置に随意的にコピーを構築し得ると仮定した ((21))。そのコピーが具現したものが目的語的同族目的語であり、それは項としてみなされるべきものであると考えた。一方、編入される名詞が、その意味特徴として「V で表

される出来事に依存して起こる事態を表す」という意味で独立した指示物を持たない場合には、コピーの構築はされ得ない。しかし、「出来事への依存性」という特徴によってその出来事を修飾する媒介として機能し得るため、(23)で示される修飾関係を表す構造への拡張が可能であり、その拡張により導入された NP が具現したものが副詞的同族目的語であると主張した。この NP は表面上は目的語的同族目的語と同じ位置に生起しているように見えるが、(23)に示された構造的な位置から解るように、VP で表される出来事を修飾する役割を果たすので、機能的には副詞と類似する、という特徴が現われることになる。

注

- 1 実際には、この2つの特徴がうまく一致しない動詞が存在する。動詞 smile は、形容詞を伴わない同族目的語をとることができるが、それと共に起する「形容詞＋同族目的語」が副詞に書き替え可能である。
 (i) She smiled a smile and up she hopped. (現代英文法辞典：256)
 (ii) She smiled a cheerful smile.
 =She smiled cheerfully.
 (i)の文の a smile は、語調を整えるために用いられている可能性がおおいに考えられる。従って、(i)は純粋な反例にはならないであろう。(ii)が可能なことから、動詞 smile はここで言う A 類に分類するのが適当であると考えられる。
- 2 H & K の分析では、非能格動詞の LRS(9)で、動詞と姉妹の位置にある NP が述語ではないため、完全解釈の要求から非能格動詞は I 統語部門では外項を持たないとされている。外項は S 統語部門において、叙述により導入される。
- 3 H & K (1991, 1993) では、I 統語部門は規則の適用に関して、S 統語部門と全く同様であるとされているので、N の編入も主要部移動制約 (Head Movement Constraint, HMC) 等の統語制約に従うことになる。
- 4 have a smoke の形では smoke がよく使われる。しかし、この場合は「煙草そのもの」をさしているのではなくて、「煙草の一服」を意味していると考えられるので、ここで扱っている同族目的語の場合と全く同じには扱えない可能性がある。
- 5 ここでは痕跡位置へのコピーの構築が随意的であるとしたが、このコピーの構築が義務的であるという可能性もある。その場合には、同族目的語の具現の随意

性は、Rizzi (1986) に提案されている、(i)の随意的な適用による空の目的語の扱いにならって導き得る。

- (i) Assign *arb* to the direct θ -role. (Rizzi 1986 : 509)

コピーの構築が義務的である、というこの接近法をとると、このコピーが具現した同族目的語が必ず格を受け取ることになる。従って注 11 で指摘する、非能格動詞の格付与能力の随意性という問題は起こってこなくなる。しかし、この考え方では、目的語的同族目的語をとり得る非能格動詞が、全て義務的に V の姉妹位置に目的語をとることになるため、この構文と他動詞構文との区別があいまいになる。

- 6 LRS では、ある語彙主要部とその項のみが存在するならば、同族目的語に伴って現われている形容詞については、s 統語部門で挿入されると考えられる。

- 7 もし、目的語的同族目的語として具現されるものが、厳密にコピーの持つ素性のみからなる名詞であるとする、本文の例文 (16) (17) の様に、動詞に編入されている名詞と、同類ではあるが異なる語を目的語としている例が問題となる。(16 a, b) の文において目的語となっている名詞は、どちらも [+DANCE] の素性を持ち、(17 a, b) の文の目的語は [+SONG] の素性を持つ。従って、目的語的同族目的語の語彙の選択と具現に関して、コピーの持つ素性のみをもとに名詞が具現される場合に加えて、コピーの持つ素性の他に何らかの弁別的素性を持つ名詞が選択、具現される可能性も考えなくてはならない。

- 8 Larson (1985) では、(i) の様な θ 役割付与が提案されている。

- (i) *Adverbial θ -role Assignment*

Assign an adverbial θ -role to α , where α is any phrase.

もし、(23) の NP が (i) によって何らかの θ 役割を与えられるとしても、(i) に関わる θ 役割が項構造に関係するものでないとすれば、ここでの議論には差し支えない。

- 9 (i) の例の目的語位置に現われている approval, applause は、動詞と同語源の同族目的語を伴っていない点で、ここで扱っている副詞的同族目的語と同様のものとして扱えるかどうか、という問題がある。

- (i) a. She nodded approval.

b. They shouted applause.

(新英語学辞典 : 196)

しかし、これらの例について、(ii) に示されるように、同族目的語を修飾する語句中の名詞のみが残ったと考え、本文で扱っている副詞的同族目的語と全く同じように扱うことができる。

(ii) a. She nodded (a nod of) approval.

b. They shouted (a shout of) applause. (ibid. : 196)

10 形容詞に限らず、付け加えるべき付加情報を持つ語句を伴う場合は、拡張が許される。注9の例(ii)を参照。

11 同族目的語が現われていない場合、s 統語部門まで保持された格付与能力が投射されないままになる、という点は、非能格動詞全般について問題になるかもしれない。同族目的語をとる場合にだけ格付与能力が保持され、そうでない場合には保持されないとするのは理論上好ましくないように思われる。この問題は、非能格動詞に格付与能力を認める分析全てに当てはまるであろう。ここではこの問題についてはこれ以上は触れない。

参考文献

- Baker, M. (1988) *Incorporation : A Theory of Grammatical Function Changing*, University of Chicago Press, Chicago.
- Burzio, L. (1981) "Intransitive Verbs and Italian Auxiliaries," Doctoral dissertation, MIT.
- Burzio, L. (1986) *Italian Syntax : A Government and Binding Approach*, Reidel, Dordrecht.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, N. (1986a) *Knowledge of Language : Its Nature, Origin, and Use*, Praeger, New York.
- Chomsky, N. (1986b) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Grimshaw, J. (1990) *Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Hale, K. and S. J. Keyser (1986) "Some transitivity Alternations in English," *Lexicon Project Working Papers* 7, Center for Cognitive Science, MIT.
- Hale, K. and S. J. Keyser (1991) "On the Syntax of Argument Structure," *Lexicon Project Working Papers*, Center for Cognitive Science, MIT.
- Hale, K. and S. J. Keyser (1992) "The Syntactic Character of Thematic Structure," in *Thematic Structure : Its role in Grammar*, ed. by I. M. Roca, Foris, Berlin.

- Hale, K. and S. J. Keyser (1993) "Argument Structure and the Letical Expression of Syntactic Relations," in *The View from Building 20*, ed. by K. Kale and S. J. Keyser, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Jones, M. A. (1988) "Cognate Objects and the Case-Filter," *Journal of Linguistics* 24, 89-110.
- Larson, R. (1985) "Bare-NP Adverbs," *Linguistic Inquiry* 16, 585-621.
- Manzini, M. R. (1992) "The Projection Principle(s) : a Reexamination," in *Thematic Structure : Its role in Grammar*, ed. by I. M. Roca, Foris, Berlin.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1972) *A Grammar of Contemporary English*, Longman.
- Rizzi, L. (1986) "Null Objects in Italian and the Theory of *pro*," *Linguistic Inquiry* 17, 501-557.
- Rothstein, S. D. (1992) "Case and NP Licensing," *Natural Language & Linguistic Theory* 10, 119-139.
- Wasow, T. (1977) "Transformations and the Lexicon," in *Formal Syntax*, ed. by P. Culicover, T. Wasow and A. Akmajian, Academic Press, New York.
- 安井 泉 (1983) 「英語の受動文について」、言語文化論集 15、69-89、筑波大学。

参考辞典・辞書

新英語学辞典 研究社

現代英語学辞典 荒木一雄・安井稔編、三省堂出版

The Random House Dictionary of the English Language, Second Edition, Unabridged, Random House.

Longman Dictionary of Contemporary English, New Edition, ed. Summers Della, Longman.

小学館 Progressive 英和中辞典 小西友七、安井稔、國廣哲彌他編、小学館

Synopsis

Two Types of Cognate Object Constructions

By Keiko Yamada

This paper is concerned with sentences called cognate object constructions illustrated in (1).

- (1) a. She laughed a hearty laugh.
b. She sang a song.

It has been claimed that cognate object constructions are divided into two classes depending on their different syntactic behaviors (cf. Yasui (1983)). One is called the adverbial cognate object construction and the other the objective cognate object construction (henceforth, ACOC and OCOC). Objects in OCOCs have such properties that they must cooccur with some modifying adjectives, can be focalized in pseudocleft sentences, and can be pronominalized. Adverbial cognate objects, on the other hand, produce exactly the opposite results to what objective cognate objects do. The aim of this paper is to analyse and explain these differences both semantically and syntactically.

Typically, this construction involves unergative verbs. The argument of this paper is based on the analysis of unergative verbs in Hale and Keyser (1991, 1993) (henceforth, H & K). I try to explain the diversity by partially modifying their argument. H & K assume that in the Lexicon, unergative verbs have a LRS (Lexical Relational Structure) where an V (which they regard something like a light verb) takes NP as its sister. Their claim is that unergative verbs are derived by incorporation of the head N of the NP to the governing V head. However, they mention little about the occurrence of cognate objects. Thus their analysis as it is cannot explain the existence of the two types of unergative verbs and hence of cognate object constructions.

What offers the key to a solution is to consider the semantic difference of nouns incorporated into the Vs. Nouns involved in the verbs in ACOC (e.g.

laugh) have a property that their referents are dependent on some event V, that is, they refer to some situation created by the event V. On the other hand, nouns involved in the verb in OCOC (e.g. *dance*) have referents independent of the event V.

Based on this consideration, I make an assumption that a noun which has an independent referent can optionally construct its copy in its trace position. According to this assumption, the incorporated noun *dance* can construct its copy in its trace position by virtue of having an independent referent, which realizes as the objective cognate object. It receives a θ -role, thus behaves as an argument with regard to the performance tests.

As for laugh class verbs, construction of the copy is prohibited, not having an independent referent. Instead, this class of verbs optionally extend the structure with an NP adjoining to VP. This yields the ACOC. Since the NP serves as a modifier of the VP, it must appear with an adjective bearing some modifying information. Besides, not being an argument with any θ -role, it cannot passivized. And the property that they cannot pronominalized nor focalized is followed by their non-referentiality.